琉游舎

アトリエ琉游舎だより 176号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/
琉游舎for healing https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3

2024年4月10日発行

花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは。雨に向かいて月を恋い、垂れこめて春の行方を知らぬもなほあはれになさけ深し。

●吉田兼好が記した徒然草の一節です。「桜の花は満開のときだけ、月は満月のときだけ見るものでしょうか。雨の日に、見えない月を恋しく思うこと。暖簾を下げて家にひきこもり、春の行方をただ思い浮かべること。どちらも趣が深い」とつづっています。春の陽気を一身に浴びて戸外で春を満喫することが春の楽しみ方の王道なのでしょうが、あえて春を見ることなく春を思い、春を楽しむ方法は日本人特有の無常感の表れなのでしょうか。あるいは春を表側から受け止める陽気な楽しみ方、反転して裏側から覗き見るような陰気な楽しみ方は、ポジとネガ、陰と陽が相まって万物が生成される陰陽思想の現れなのかも知れません。

●安倍晴明で有名な陰陽師は古代中国の思想に端を発し、森羅万象、宇宙のあらゆる事物をさまざまな観点から陽と陰の二つのカテゴリに分類する思想、陰陽五行思想を起源として、天文学や暦の知識を駆使し、日時や方角、人事全般の吉凶を占う技術者、呪術師のことです。

●現在は呪術や占いで未来の事象を判断することはないでしょうが、人は信じたいことだけを信じ、みたいものだけを見て、聞きたいものだけを聞く生き物でもあります。信じることが盲信となりませんように。また物事には必ず裏表、陰と陽があります。太陽は日向と同時に日影を作ります。冬の間は恋しかった日向が、夏になって木陰でほっとすることもあります。陰陽のバランスを取ることが、きっと心地よく毎日を過ごす秘訣なのかも知れません。

●近年は春だからと戸外で暖かい日差しとそよ風を一身に浴びたいと願う人ばかりではないでしょう。花粉が飛散し大陸からは黄砂が飛来し、洗濯物も外に干せなくなる季節も春です。しかし冬の間じっくりと休んでエネルギーを蓄えた自然が一斉に目覚めて活動を再開する春はやはり心が浮き立ちます。まずは満開のコリーナの桜を満喫したいと思います。

4月・5月スケジュール

月	火	水	木	金	土	日
15	16	17	18 映画会 13時半から	19	20	21
22	23 読書会 13時半から	24	25 映画会 お休み	26	27	28
29	30	5月1日	2 映画会 お休み	3	4	5
6	7	24	9 映画会 13時半から	10	11	12 写経会 13時半から
			11 映画会 13時半から	12	13	14

読書会
4/23・5/14
（火）13時半

写経会
5/12（日）
13時半から

映画会
4/11・5/9
（木）13時半

狂言綺語…個に帰る

琉游舎
Ryu Yu Sha
Place to pray, play and progress

現代は多死社会に入ったと言われています。多死社会とは高齢者の増加により死亡者数が非常に多くなり、人口が少なくなっていく社会のことで、超高齢化社会の次に訪れる社会と位置づけられています。人口の減少につれ人生の最終段階では今まで家族が担ってきた病院へ連れていくことや、介護などの日常生活支援、施設に入る際の身元保証や経済支援、葬儀や家財の片付けなどの死後対応が必要になります。しかし現在、高齢者の独居、身寄りのない人が増えています。子供も遠くに住み親戚づきあいも希薄になる中、多死社会では、家族に頼れない高齢者は、安心して死を迎えることができなくなるでしょう。親の老後は子供が見るという家族制度が崩壊し、今では高齢の親が子供の面倒を見ているという逆転現象も起こっています。

僧侶は生と死を繋ぐ媒介者です。寺があり墓があり檀家と菩提寺の関係が先祖と子孫との血縁の維持に大きな役割を果たしてきましたが、今や自分の墓は自分で作り自分たちの始末も自分で行わなければならない時代です。僧侶や寺は家族制度の関係の中に位置づけられていたため、その基盤が崩壊すると本来の僧侶の役割を考えようとせず右往左往するだけです。私たちの生と死を繋ぐに今まで不可欠であった家族と菩提寺が完全に機能不全に陥っている中、問われているのは各々の僧侶が生と死の媒介者として何ができるかを考え実践することで、私たちのいのちを次に永遠のいのちとして繋ぐ役割を担えるかという問いに行動を通して応えることです。私は今、僧侶が自由に本来の宗教者としての役割を担うチャンスが来たのではないかと考えます。家族制度の中に閉じ込められていた寺と僧侶が、その窮屈な関係から脱することで純粋な意味で生と死を繋ぐ役目を与えられると考えるからです。言うまでもなくこの役目は私たちが良き生を送ることで、心安らかに良き死を迎えることができると言うこと、そして残されたもの（血縁に限らず）が、死者のいのちを受け取ってそれを永遠のいのちとして次に繋げようとすること、これが生と死の媒介者の役目です。

私は僧侶となって私的な寺院琉游舎を立ち上げました。日蓮宗の僧侶の資格を持ちながら宗門に属さない、あくまでも独立した宗教施設です。ここは当初からあらゆる宗教も宗派の人にも開かれた寺院であることを標榜しています。ただ弔いや供養は日蓮宗の様式に則った方法で行いますとお話ししています。その中で宗教と無縁で自分の宗派も知らなかった人でも、大切な方をなくした場合にはせめて経を上げて送り出したいと願う人がほとんどだということを知りました。当初私の役割は亡くなった人を弔い、経を唱えて引導を渡す役目に過ぎませんでした。生と死の媒介者とはいえ、実質的には死を媒介にして残された人の「生」と亡くなられた人の「いのち」を繋ぐことを自称する役割でしかなかったのです。しかしこれは宗教側の理屈です。なぜならば死者は自分のいのちが永遠のいのちとして繋がるということを生前に知ることができないからです。だから死者にはその実感と確信がないまま亡くなられていくしかなかったのです。私が志向していたことは宗教側の都合の良い作り話だと言われても仕方がないでしょう。良き生であったと思えることで良き死を迎えることができるようになることが、生きるということであるならば、生きること自体が死を見つめること、死に向かって生きることではないでしょうか。ならば僧侶は「生」から「死」への因縁縁起の過程をともに歩む伴走者でなければ、生死を繋ぐ媒介者と自称することはできないはずです。しかし私が関わる全ての方の生の伴走者となることは不可能です。どうやら出口のない洞穴に入り込んでしまったようです。

ここで私は自らに提案をいたします。自らの死を家族や親族や社会との関係の中で考えるという志向を一回断ち切って、あくまでも自分の死は自分だけの個人的なものだと考えることです。人間は産まれてくるとき「おぎゃー」という声をあげて私はここに「在る」と宣言し生まれてくるのでしょう。丸裸で何の属性も身に着けず「個」と生まれた私の、親子や社会関係の始まりです。生きるということは「個」が「社会」となることなのでしょう。それは「おぎゃー」というコミュニケーションに始まり数多の声を発し続けてコミュニケーションを取り続けていくことなのです。そして声を発しなくなる時、私はここには「無い」と宣言しコミュニケーションのない無言の世界に入るのです。「おぎゃー」に始まった有声の生が無声の死を迎えた時、関係性の世界から個の世界に私は帰っていくのです。死は個に帰ることと考えることが出来たならば、良き死を迎えるためによき生をどう生きるかも自ずからありのままに観えてくるのではないでしょうか。

多死社会に入った時、死は否応なく個であること、孤独であることを私は知らされることになるはずなのです。が、しかし死者となってしまった私は多死社会の死（孤独）を実感することはできないでしょう。死者は何も実感することのできない無の世界に帰ってしまうからです。ただ何も関係ない人たちが私の死を多死社会の死（孤独死）として知る他人事です。私の死が人に残すものは永遠のいのちどころか、遺体と不要な遺品だけとなってしまうに違いありません。私の死を不要としない人たちが妻や子を含めているに違いない、私の死が残された人たちに意味のあるものであるに違いないと考えることは、未だ死者でない私の生者の傲りです。良き死を迎えることは、再び個に戻ることに向かって今まで社会に纏わされたあるいは纏わざるを得なかった属性をゆっくり脱ぎ捨てていくことではないでしょうか。それが自らの生を良く生きてきたとの実感であり、何の憂いも心配もなく残された人にグッバイと手を振って個に帰ることだと思います。

妻が私の死を覚悟した時からはや1年半が経とうとします。その間に私は自らが纏ってきた属性を脱ぎ捨てるどころか新たにまた数枚纏ってきたに違いありません。肉体が死から遠ざかると個に戻ることはかように困難なことです。まず出来そうなことから，例えば遺品や遺産の目録と行先の整理などからはじめるのはどうでしょう。個に帰るための歩みが、今を良く生きることを強固にすると信じてまずは今できることから。